



TITLE:

泌尿器科疾患のもたらす国家・社会的損失についての二,三の意見

AUTHOR(S):

吉田, 修

CITATION:

吉田, 修. 泌尿器科疾患のもたらす国家・社会的損失についての二,三の意見. 泌尿器科紀要 1987, 33(10): 1560-1561

ISSUE DATE:

1987-10

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/119314>

RIGHT:

泌尿器科疾患のもたらす国家・社会的損失 についての二、三の意見

京都大学医学部泌尿器科学教室（主任：吉田 修教授）

吉 田 修

PREVENTION OF UROLOGICAL DISEASES CAN BE A NATIONAL BENEFIT

Osamu YOSHIDA

*From the Department of Urology, Faculty of Medicine, Kyoto University
(Director: Prof. O. Yoshida)*

Early detection of urological cancers by means of mass screening would be beneficial to the nation, as can be seen in the advances in the detection of stomach and lung cancers. Medical students in Japan today should be studying the economics of medicine, that is, how to prevent cancer instead of studying economics to become prosperous after opening their own offices. This view should not be confined to our nation, but should be directed toward all of mankind in the whole world.

Key words: National burden, Urological diseases

標題のシンポジウムに発言の機会が与えられたのは、会長渡辺教授からこのテーマでやりたいとの話がでた時に、わたくしは即座に賛成したのでありますが、賛成したのだから協力もしろということだと思えます。司会の友吉教授に総括的発言とは何をしゃべればよいのですか、とお尋ねしましたら何でもよいからしゃべれということでもあります。考えてみれば総括的発言はこれは司会者がやるべきことでもあります。お言葉に甘えてまとまりのないことを申し上げます。

私は、過去において〔国家的損失〕あるいはその反対の〔国益〕といった言葉に出会って〔はっと〕したことが二回あります。

一度は1975年頃だったと思いますが、ワシントンの日本大使館に勤務している外交官と話をしているときに、彼がしばしば国益という言葉を使った時です。当時まだ学園紛争の続いていた頃で、radicalな学生と話し合いというか、団交というかをする機会が多かったわけです。そのときに、もしも〔そんなことは国益に反するから反対だ、駄目だ〕などというものなら、〔帝国主義者〕よばわりをされるのは必定であったと思います。そのような頃に、国益という外交官の言葉にはなったのであります。

少し大袈裟に言えば、「自分には日本という国があ

り、日本という国の共同体の中に生きているのだ。」という当然のことを思い起こしたのであります。お恥かしい話です。

もう一度は、これは渡辺教授が熱心にやっておられる経直腸の超音波断層法による前立腺癌の集団検診を「アメリカでこそやるべきだ」と、詳しいことは記憶しておりませんが、アメリカの行政関係の人に説いたところ、「前立腺癌は老人に多い、したがって national damage が少ないからやらない」といったいうことを聞いた時であります。疾患のもたらす national damage という言葉も大変 impressive で、ずーと頭に残っておりました。

こういったことから、わたくしも疾患の経済学について関係した書籍あるいは論文に目を通すようになったのであります。このような次第で、渡辺教授の企画に即座に賛成したというわけです。

それぞれのシンポジストから大変有用なお話をうかがえました。教えられ、考えさせられるところが多々ありました。気付いたことを一つだけ申し上げます。

本日の発表の中で数字がたくさん出てまいりました。たとえば、集団検診をやって早期癌を発見し治療させるとどのくらい国家に利益をもたらすか、といったことです。ここで気になりますのは、その算出の過

程でいくつかの仮定的要素が挿入され、最終的に得られる数字が膨張することです。これはある程度仕方のないことですが、少なくとも同じ方法で他の癌についても算出し比較することが必要ではなかったかと思います。たとえば「前立腺癌を検診で早期に発見し治癒させた場合、一例ではこの位の利益をもたらすから、日本全体ではこうなる。これを胃癌、肺癌、あるいはその他の癌と比較するとこうなる。」といったことをやって欲しかったと思います。そうでないと、泌尿器科という社会の中だけの議論になってしまいます。

次にこのテーマについての私のコメントを二つだけ言わせてもらいます。

まず、「日本の医者ほど教育を受けている時、あるいは大学にいる時は、経済のことは無関心で、開業した途端に猛烈に経済に関心をもつのは世界に例をみない。」といわれております。医学教育のなかに医療経済学を取り入れなければならない、と思います。そし

てそのことにより、予防医学の重要性が認識される、癌を例に取るならば、一次予防とよばれる原因対策、そして二次予防である早期発見対策の重要性が認識されると思うのであります。

もう一点はつぎの点です。ある文化人類学者がこのように言ったことがあります。「われわれ人間はかつては一つの小さな共同体の中で十分生きられた。たとえば歴史的に見れば〔藩〕であります。それが今や、日本と言う国家、ついには、世界とかかわらずには生きていけない状況にある。国家のレベルから地球のレベルになりつつある。つまり人間という種のレベルである。本当は種のレベルを越えて、生物全体のレベルにまで戻るのが理想である。」

私は、現在は国家的損失について先ず論じるのはよいが、さらには種のレベル、言葉を換えて言うならば、世界とのかかわりにおける問題として考えなければならぬと思います。

(1987年3月13日受付)